

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1159
施設名	ChaCha Children Todoroki
施設所在地	東京都世田谷区等々力7-7-9
法人名	社会福祉法人ChaCha Children & Co.

1. 活動のテーマ

<テーマ>

虫

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

出会った植物や虫への愛着から、模様・形・色への興味が生まれることをきっかけにプロジェクトがスタートした。光のコントラストや影の変化を通して、気づき・考え・行動・表現へとつながる環境を構成した。

2. 活動スケジュール

【6月～8月】 虫の特徴・違い・模様・住処の探求

・プロジェクター映像、段ボール、土粘土、廃材、ライトテーブルなど

【8月～10月】 光と現象への探究/虫・植物・食べ物を言葉にしながら表現

・ライトテーブル×絵の具、キューブ遊び、カラー積み木、磁石パネル、光による影×色の重なり

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

・多様な環境設定を行うことで、子どもたちのイメージが広がり、自ら五感が動くような環境を構成する。

・安全面に配慮しながら、子どもたちが主体的に行動・表現できるよう関わる。言葉が未発達な段階でも、その時々での閃きや感情を外に出し、共有できるようサポートする。

・気づきや閃きが次の好奇心へとつながるよう、環境や素材を適宜追加・更新していく。

◆キューブ、カラー積み木、磁石、パネルプロジェクター、スクリーン、iPhone、iPad、ライトテーブル、キューブ、OHP、土粘土、砂、貝殻、段ボール、枝、廃材、固形絵の具、筆、卵パック、はけ、カラーキューブブロック、スケルトンブロック、OHPフィルム、観葉植物、葉、廃材カップ、布、ライト、カラーフィルム、ざる等

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

プロジェクターを用いて、てんとう虫やだんごむしを拡大投影し、形や色、特徴に着目できる環境を設定した。また、ライトテーブルではマテリアルや植物、虫の写真を配置し、自由に組み合わせながら表現できる場を構成した。砂とマテリアルを組み合わせることで、光の中に現れる曲線や形の変化を感じられるようにした。土粘土は手触りを通して素材の特性に触れながら造形活動を行い、木の枝や木の実などの自然素材も取り入れ、虫の制作へとつなげた。

絵の具の活動では、色の混ざりや筆の感触を味わいながら、投影された虫をなぞるなどして表現の幅を広げた。さらに、三原色のカラーライトを用い、光の重なりによって生まれる色の変化や影の変容を体験できる環境を設定した。

ライトペンと蓄光シートを用いた活動では、「線」をテーマに光で描く体験を取り入れた。加えて、ライトテーブル上での絵の具遊びでは、水と色の混ざりによる変化を探究できるようにした。

そのほか、カラー積み木や磁石パネルなどをキューブ状に配置し、光を当てることで色や影の重なりを楽しめる遊びへと展開した。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

、虫の写真や植物、マテリアルを組み合わせながら「ここがおうちだよ」「ここでごはん食べてるの」と、てんとう虫やだんごむしの暮らしをイメージしていた。砂の上に素材を並べたり動かしたりしながら、光の中に現れる形や線の変化を楽しみつつ、自分なりの世界をつくり出していた。保育者は、「どんなおうちなの?」「誰がいるのかな」と問いかけ、子どものイメージを言葉として引き出し、共有する関わりを行った。子ども同士の表現をつなぐことで、遊びが個から関係性へと広がっていった。子どもたちは互いのつくった“おうち”から、「ここに来ていいよ」「一緒にあそぼう」と言葉を交わし、イメージを重ね合わせていく姿も見られた。保育者はそのやりとりに寄り添いながら、必要に応じて素材を加えたり環境を調整したりすることで、表現と対話が循環していくよう支えていった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

子どもたちが虫や花との出会いを通して、色・形・生態への興味や気づきを言葉にした際、保育室とアトリエが隣接している環境を活かし、その思いや発見をすぐに環境へ反映することができた。「光と影」「色と形」の表現を意識したセッティングを行い、さまざまなコーナーの中で、子どもたちが言葉を交わしながら粘土や多様な素材に触れ、発見や探究を楽しむ姿が見られた。また、ゆったりと集中して遊び込めるスペースを確保することで、一人ひとりが自分なりの表現を深めていく姿が印象的だった。

職員同士の連携も円滑で、子どもたちとの意思疎通や活動の展開が非常にスムーズに行われていた。一方で、光と影を活かした環境設定は、空間全体が暗くなりやすく、見通しが悪くなる側面もあったため、乳児の安全面を最優先に考慮しながら環境を調整していく必要があった。変化し続ける環境を安全に維持しながら構成していくことには、多くの時間と工夫が求められた。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1159
施設名	ChaCha Children Todoroki
施設所在地	東京都世田谷区等々力7-7-9
法人名	社会福祉法人ChaCha Children & Co.

1. 活動のテーマ

<テーマ>

街

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

散歩中に見つけた万博のポスターをきっかけに、パビリオンの多様な形状やその意味について対話し、カプラや積み木を用いてその構造を再現を行った。その過程で、建築中の木造校舎の柱に注目し、粘土製作において「柱があるから屋根が載っても潰れない」という構造上の原理に自ら気づき、実践に繋がり、自分たちの理想とする国やまちのデザイン図面を作成し、土粘土や多様なマテリアルを用いて建物の構造を試行錯誤しながら具現化した。また、制作したまちに必要なインフラや方角による環境の違いについて対話を重ね、既存のイメージを社会の仕組みや未知の国々へと広げながら、自分たちを取り巻く世界の本質的な繋がりと多様性について探究した。

2. 活動スケジュール

- ・グループ内でそれぞれのキャラクターを共有できるように対話の時間を設け、共に活動するメンバーとしての関係性を育む。
- ・「国やまち」への興味を起点に、各グループの想像を尊重し、表現の実現に向けて素材収集や環境構成を行う。
- ・視野や思考を広げるため、プロジェクターで世界の建築物の映像を投影する。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・多様な環境設定を行うことで、子どもたちのイメージが広がり、自ら五感が動くような環境を構成する。
 - ・安全面に配慮しながら、子どもたちが主体的に行動・表現できるよう関わる。言葉が未発達な段階でも、その時々での閃きや感情を外に出し、共有できるようにサポートする。
 - ・気づきや閃きが次の好奇心へとつながるよう、環境や素材を適宜追加・更新していく。
- ◆キューブ、カラー積み木、磁石、パネルプロジェクター、スクリーン、iPhone、iPad、ライトテーブル、キューブ、OHP、土粘土、砂、貝殻、段ボール、枝、廃材、固形絵の具、筆、卵パック、はけ、カラーキューブブロック、スケルトンブロック、OHPフィルム、観葉植物、葉、廃材カップ、布、ライト、カラーフィルム、ざる等

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

【キャラクター制作～表現の展開】

・デザイン図面 → 発表 → 素材による表現へと展開、紙粘土・絵の具を用いた制作

【12月】国・まちの制作

グループごとに国やまちを構築し、それぞれの世界観を表現した。

例：大工の町／花の町／モグモグタウン／万博の町／キラキラタウン／海の国／ライブ会場の町

・土粘土や多様なマテリアルを用いた建物制作、素材の使い方のサポートと活動の共有

【1月～3月】まちに必要なものへの探究

対話を通して、国やまちに必要な要素を考え、制作へと展開した。

出てきた要素：道／電車／バス／店／海／宇宙／星／ゴミ処理／消防／映画館／自動販売機／お金／飛行機／スーパー／電信柱／ライフライン など

さらに、スウェーデンなど国への興味の広がり、寒い国と暖かい国の違い、方角（東西南北）とその特徴の探究

東＝太陽／南＝森／北＝雪／西＝虹

イメージをもとに対話と表現を重ね、世界の理解を広げていった。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

万博をきっかけに、キャラクターづくりから「国やまち」へと活動が発展し、ひとりひとりが自分のキャラクターや建築物の制作に取り組んだ。デザイン図面を描き、発表を経て、紙粘土や多様な素材を用いて表現する中で、自分のイメージを形にしていく経験を重ねた。制作の過程では、「ここはモグモグタウン」「お花がいっぱいのまちにしたい」など、それぞれの世界観が言葉として表出し、友だち同士で共有しながら活動が進んでいった。また、「ここに道をつなげよう」「電車も走らせたい」といった声から、個々の表現がつながり合い、まち全体を構成していた。さらに、「ゴミはどうする？」「お金がいるよね」など、生活に必要な要素にも関心が広がり、水道管や空港などの存在が子どもたちの対話の中から生まれ、表現へとつながっていった。国への興味も深まり、「寒い国とあたたかい国がある」「北は雪なんだよ」といった気づきをもとに、方角や環境の違いを取り入れた表現も見られた。保育者は、子どもたちの対話を大切にしながら、それぞれのイメージが共有されるよう仲立ちを行い、活動が個人に留まらずグループとしての創造へと広がるよう支えた。また、世界の建築物の映像を提示することで視野を広げ、多様な発想につながる環境を構成した。さらに、必要に応じて素材を加えたり問いかけを行ったりすることで、子どもたちの思考や表現が深まるよう関わった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

万博への探求活動から実際の立体的な「街づくり」へと発展し、探究を深めていった。スーパー、飛行場、ごみ処理場、電信柱などのライフラインに至るまで、子どもたちと対話を重ねながら細部まで作り込む姿が見られた。建物は土粘土で表現したり、段ボールや布など多様な素材を活用したりしながら、それぞれの「町」や「国」への強い思いやアイデアが形となって表れていた。一人ひとりの個性豊かな表現や、次々と生まれる発想によって、アトリエ空間そのものが日々進化していく様子が印象的だった。一方で、子どもたちの圧倒的な表現や活動の広がりに対して、担当職員間での対話や共有が十分に追いつかない場面も見られた。今後は、アトリエを「園全体がいつでも気軽にアクセスできる開放的なスペース」として位置づけるとともに、多様な素材との出会いから新たな発見・探究・表現へとつながる環境構成をさらに工夫していく必要性を感じた。

実践とリフレクションを継続的に行うことで、保育者が用意した環境の中から、子どもたちの多様な100の言葉が生まれていることを実感した。それらの言葉を起点として、子どもたちは対話を重ね、探究を繰り返しながら、多くのことを学んでいた。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1159
施設名	ChaCha Children Todoroki
施設所在地	東京都世田谷区等々力7-7-9
法人名	社会福祉法人ChaCha Children & Co.

1. 活動のテーマ

<テーマ>

テーマ：動物

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

散歩中の「もーもーいた」という言葉から、ダルメシアンの子犬の柄と牛の模様の共通点に気づいたことをきっかけに、動物の鳴き声や食事の仕方を模倣してその特徴を試行した。また、表情から感情を推察したり、友だちと協力して動物へのなりきり遊びなどの身体表現を繰り返しながら、対象の形態や生態と自己のイメージの関連性について探究した。

2. 活動スケジュール

- 【5月】 ダルメシアンとの出会いから動物への興味
- 【6月～】 動物へのズボンなどでなりきり、動物模様の製作
- 【7月～8月】 動物の動き、食べ方への探求
- 【9月～】 自分のお気に入り動物(柄模様・形・鳴き声・顔)
- 【10月～】 粘土×動物フィギュアと住む場所への興味
- 【11月～】 動物の顔・表情・気持ち×自分の顔・表情・気持ちへの興味
- 【12月～】 自分の気持ち・相手の気持ち

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・多様な環境設定を行うことで、子どもたちのイメージが広がり、自ら五感が動くような環境を構成する。
 - ・安全面に配慮しながら、子どもたちが主体的に行動・表現できるよう関わる。言葉が未発達な段階でも、その時々での閃きや感情を外に出し、共有できるようサポートする。
 - ・気づきやひらめきが次の好奇心へとつながるよう、環境や素材を追加・更新していく。
- ◆戸外時暑さ対策用コイルマット／安全面強化カーペット／土粘土／油粘土／ハイチェア／プロジェクター／自然物(枝、ドングリ枯葉、きのこ)／動物なりきりズボン／手作りソファ／動物フィギュア／絵本／鏡 等

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

様々な動物の対象の形態や特徴への探究が始まった。動物の表情を観察し、目の形や口の開き方から「おこってる」「ねんね」と感情を推察したり、玩具の口元に食べ物を見立てた素材を運んで食事の仕方を再現したりしながら、対象へのイメージを膨らませた。

また、動物の鳴き声を模倣したり、室内やテラスで動物をイメージした歩きの動きを試行して身体感覚との関連性を探るなど、生態への理解を深めた。さらに、友だちと協力して動物を模したズボンを履く際、言葉を交わして教え合う中で、共通の対象を通じた他者との相互理解や共感について探究した。ハイチェアでの安定した姿勢の中で土粘土の弾力や形状の変化を指先で試したり、枝などの自然物を組み合わせて異素材の繋ぎ合わせを試行しながら、微細な手元の動きと素材の性質、イメージの具現化について探究を深めた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

散歩中に見つけたダルメシアンを「あ、もーもーいた」と表現したり、本物の牛の鳴き声を聞いて「ヴ〜」と低い声を出したりするなど、実体験からイメージを広げていた。動物への興味は友だちとの関わりにもつながり、「こうよ〜」「つぎあしこっちょ」とズボンの履き方を教え合ったり、「〇〇くんは〜?」とMyフィーリングを通して気持ちを尋ねたりしていた。保育者は、「どうしたんだろうね?」「どのお顔?」など子どもの気づきや表現に寄り添う言葉掛けを行い、友だち同士のやりとりや探究が深まるよう支えていった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

子どもの変容に応じて環境構成を適宜見直し、生活動作における「やってみたい」という意欲を尊重して、大人がその想いを受け止める丁寧な養護の実践を重ねた。当初の戸惑いはあったものの、日々のやり取りを通じて深い信頼関係を築き、子どもたちが情緒の安定した状態で活動に没頭できるよう、適切な足場かけを行った。

リフレクションを通じ、子どもの100の言葉や環境に対する反応を多角的に捉え直すことで、動物への興味が生活へもつながる過程を実感した。子どもたちが楽しみながら身体能力や認識を広げていく姿を身近に見守り、興味に合わせた活動の展開を追求したことが、保育者自身の探究心や喜びにもつながった。